

---

# 闇に踊る物語

あくた咲希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇に踊る物語

### 【Nコード】

N2246Z

### 【作者名】

あくた咲希

### 【あらすじ】

別名義時代に書いたお話です。一時期サイトに載せていたような記憶。

稲穂は、やさしく老いた父母とともに暮らしていた。そこへ現れたのは、ほたる火をまとった、全身傷だらけの青年……。彼は、名を速風といった。

連載全14回。

ちよこつと色っぱい表現と、残酷シーンあり。ご注意ください。

## 序

黄泉<sup>よみ</sup>のとびら。根の国に通じる道。

国産みの、神産みの母たる女神　死した妻を追い、国産みの、神産みの父たる男神は黄泉の国を訪れた。

しかし。

ふたりが夫婦だったのは、今は昔の話。

根の国の女神と天つ男神は袂を別ち、黄泉のとびらは閉ざされて、黄泉の闇は深き地下に追いやられ……。

天つ男神は川原にて襖をおこない、貴き三柱の神を産んだ。

左目より日輪。右目より月輪。

そして息吹より生まれし神は、その産声で母を欲した。

日輪たる姉神は、不憫な弟神を母がわりに愛し。

月輪たる兄神は夜の闇で、黄泉のとびらを隠した。

\*

「もう、私には抱かれぬというのか？」

若き男神の吐息は猛々しく熱く、彼が呼吸しているというだけで女神の胸はじりじりと締めつけられ、焼け焦げるようだった。

無意識にかぶりを振りそうになるのをこらえ、唇を引き締めて頷く。彼が絶句した気配はなかったが、それでも一瞬、空気の流れが止まったように思った。

女神は顔を上げ、誰よりも愛しい弟神を見つめた。

「すべては秩序のため。わたくしは、手本となるべき神」

情に溺れてはならない、自分は、この天上の原を統べる神なのだから。

ひとたび決意してしまえば、彼女の意思はなににもまさる誓いとなる。

「姉上は、私がお嫌いかな？」

希代の乱暴者と揶揄される弟神のおもてにふと現れた、すぎるよ  
うなまなざしに一瞬どきりとしたが、眉を動かすことなくやんわり  
否定する。

「わたくしがあなたを嫌いになるということはけしてありません。  
そう、けして……ただ、心のほかで通い合うことはやめましょう。  
そう申しているだけです」

「体を合わせずして何が通い合うと？ 想いは空気を伝わるとでも  
？ ばかな。触れなければ伝わらぬ」

弟神は片腕で空を薙ぎ、白い歯を剥き、鼻孔を膨らませた。彼が  
怒ると、地までもがわななくようだ。

「わからぬことを申されるな。わたくしはあなたを愛しています。  
それでじゅうぶんと受け取られませ」

今にも抱きすくめようとしてきた弟神を逃れ、女神は、そのつま  
先から光の筋を立ち昇らせた。やわらかな衣の裾が鮮やかに色移り  
かわり、やがて風をはらみ大きく膨れ上がる。

「姉上！ ばかな、ばかな あなたをなくしたら、私は光を失っ  
たも同じだ。なぜ、私にそのような仕打ちをなさるのだ」

懇願にも似た弟神の切ない声音が、姉神の誓いを揺るがせようと  
する。

女神は白々とした手をつと伸ばしかけ、体の奥にばかりとした空  
洞を感じた。

(わたしとて……)

統治神としての自覚に隠れた本心が声になる前に深呼吸をし、自  
らが生んだ輝きに同化しようとした。

その時だった。

鈍い衝撃が全身を襲い、光の消滅した足もとに女神はくずおれた。  
閉じた眼の裏に、営みを止めゆく心臓にぬるぬるとした暗い長虫  
が絡みつく幻覚が見えた。たおやかなのどは悲鳴を上げることでも  
できず、またたくまに硬直してゆく。

女神は遠のく意識の中で、弟神の名を呼んだ。

しかし。

かすれた声は、長虫に食われてしまった。

かわいいいくしゃみがひとつ、清水の跳ねる音とともに夜の曇天にこだまする。

「うー、寒い」

表面のなめらかな岩にしがみつくようにして、少女ははだかの肩を震わせた。

「おとうさん、おかあさん！ もう、出るから！」

ざば、と音を立てて冷たい水から脱出する。

川辺の小屋から、老いた両親が手に布切れをたずさえて小走りに駆けてきた。その布切れで、女の子のくせにふくらみの足りない体をひととおり拭くと、今度は丁寧に手足を撫ではじめる。

それよりも早く着物を着せてほしいと思いつつ、むしる昼に水浴びさせてくれればいいのにと内心反抗しながらも、少女は親のなすままになっていた。

すでに七人の娘を手もとから失っていて、先もそう長くない老夫婦は、ただひとり残った末娘を蝶よ花よと育てている。

それはいわば手飼いの蝶であり、花であり……。

偏り、ひたむきすぎる愛情は時として狂気をはらむ。撥ねつければ、あたたかな手もたちまち獐猛な牙に変貌するのではなからうか。少女はそんな妄想に怯えていた。

だから、小さな籠の中でしか飛べないことに不満はあるにしても、両親の前で顔に出すことはしない。

かわりにいつも、なるたけ笑顔でいることに決めていた。その成果というべきか否か、どんなに機嫌の悪い時でも仮面をかぶるより早く自力で微笑を頬に張りつかせるといふ芸当ができるようになって、少々、複雑だったけれど。

「おお……晴れてきた。月が見えるよ、稲穂<sup>いなほ</sup>」

父の白く垂れさがった眉のかけから糸のごとき双眸が見上げた先

を、まず母が父とそっくりな眼差しでたどり、少女もまたそれに倣った。

生い茂る樹々のはるか上空にぽかんと浮かんだ、端のほんの少しかけた円は青白く、透きとおるようにひっそりとしている。

(今夜は一段と淋しそう)

稲穂は眉を八の字にさげた。

(抱きしめたい)

太陽は眩しすぎて目を向けられないけれど、控えめな光を放つ夜の月はやさしく、日のあるうちに姿を現す月は頼りなくて、無性に惹かれた。

(あなたは太陽の影。ほんとは、太陽のそばに行きたいのよね)

しみりしているうちに服を着せられ、両手を引かれて、稲穂は小屋の戸口をくぐった。

(あたしは、あなたの影なんだわ。きつと)

粗末な屋根は穴ぼこだらけのくせに空までは見えなくて、ただ、冬の終わりの風を迎え入れてギシギシと鳴っている。

背格好までよく似た父母に挟まれて、寝床に体を横たえながら、少女は月を想った。

\*

(朝、よね?)

さめたばかりの目をこすり、稲穂は横になつたまま首をかしげた。まるで厚い布きれで、小屋ごとすっぽり覆われたかのように視界が暗い。起き上がってまわりを見回してみるが、そばにいる両親の顔すら見えない。

まだ夜中かしらと言い合いながら、とりあえず火をおこして、戸口に置いた二段の器の中を確かめた。上はからっぽで、下には水がひたひたに張っている。

上の器にはごく小さな穴があいていて、寝る前に水をいっぱい



入れておくと次に起きる頃にはすべて下の器に流れ落ちているはずで、やはり今は朝らしかった。

「太陽が寝坊してるのね」

珍しく両親より早く起きた稲穂が呆れて言うと、父も母も皮のあまったのを鳴らして笑った。

しかし、この不思議は気味が悪かった。

とはいえ、誰かに答えを求めようにもここには隣人すらおらず、普段どおりに一日をはじめよりほかはなく……。

朝餉の後片付けは稲穂の仕事で、水浴び場より少し下の、川が湾曲して浅くなつたところで洗い物をした。

木をくりぬいて磨いた椀と、細い枝を集めてきて皮を剥いで揃えた箸は、砂利でこすつたあと水の流れに任せてすすぐ。そのまま流されていった箸は数知れず、今では水が淀まない程度に石を積み上げて、もしもの時のために備えている。

でも、ふが悪い時も当然あるもので。

箸は指をすりと離れ、あツと声を上げたときにはすでに堰の隙間を突破し、川下の暗闇へ消えてしまっていた。

稲穂は、手に残つた四本を炎のあかりに照らして肩を落とした。流れていったのは、手で持つ部分に赤土をすり込んで色をつけた彼女お気に入りの一膳だった。

（追いかけなきゃ。早く）

傍らのあかりに手を伸ばしかけて、ふと気づいて引つ込めた。携帯用の焚き火ではあるが、これは小さな石の碗底に据えつけた火種に木片をくべただけのもの。取っ手がついているわけではないので時間がたてばたつほど熱くなって、とても持ち運べるものではない。（しかたないわ）

ほかの食器まで流れないように置き場所をかえて、稲穂はすつくと立ち上がった。だめでもともと、見つければ大幸運だというぐらゐの気持ちで走り出す。

幸い、彼女には度胸があった。それと、暗がりでも多少は利く、

ころんとした愛らしい黒目がちの瞳も。

飛ぶように駆けて、砂利ばかりが目立つようになつてきた頃、  
指す先でなにか影が動くのをみとめて稲穂は足を止めた。目

ちゃらり、ちゃらりと川底ごと水をかきまぜるような音が聞こえてくる。

いまだかつて（焚き火の碗に触れた以外に）危険に遭遇したためしのない箱入り娘は、及び腰になることもなく、じっと目を凝らして得体の知れない黒い影を見た。

人かどうかさえもわからない。

そもそも両親以外に人を見たことがない稲穂である。七人の姉についてさえ、時折り話に聞く程度。

だから、好奇心がうずいた。危険など、みじんも心配しなかった。ともかく相手に気づかれないうようにと足音をしのばせ、一歩、また一歩と、影の輪郭がはつきり見えるところまで近づく。

すると、ずっと大柄だが、影もどうやら父母や自分と同じ人の形をしているらしいことがわかった。

（……？　なんだか、苦しそう）

ハッハツとかすれて破裂する息遣いが、夜と同じに冷え込む空気を伝わって彼女の鼓膜を刺激する。

「だいじょうぶ？」

思わず声をかけると、低い唸り声とともに影がぐらりと揺らめいた。

「ひゃあっ！」

胸もとを強く引き寄せられ、少女の体はくの字になって宙を飛んだ。

「だれだ」

押し殺した声が血の匂いとともに目の前で吐き出された。

稲穂は顔をそむけ咳き込みながら、服をつかむこぶしに手を触れた。こぶしはひとつで少女の両手にあまるほど大きく、指の関節はひびくひびくとしていて、小屋のあるところよりもさらに上流に

眺むる巖のようだった。

常ならぬ気配を感じ取り、稲穂は唾を呑み込んでそろそろと正面を向いた。

殺気立って光る二つの目が自分をにらんでいる。少女は叫びそうになった。

「なんだ、人のことか」

着物のいたるところに血を滲ませた男は、気を失わんばかりに顔を引きつらせた稲穂を確認すると、にわかには表情をやわらげた。

「箸が流れてきたから、誰かいるとは思っていたが」

すっと腰を降ろし、あぐらをかいてその上に彼女を座らせる。

「この暗いのに箸を追ってきたのか？ よかったな、そら。とっておいた」

「あ、ありがとう」

呆然としながら差し出した両手にひと組の箸を受け取って、握りしめてようやく稲穂は自分を取り戻した。

目をしばたたかせながら、血で汚れていてもそれとわかる端正な顔を見上げ、先ほどもまでの鬼気迫るものはなんだったのかと訝しんだ。それと同時に、この人はどういう人なのかと考えた。

男は、父ほどに老いてはいないが深みのある低い声でしゃべり、白くはないが母のように髪を長く垂らしている。髪は乱れてはいるものの艶やかだ。耳たぶや手首足首では、きらきらした飾りが涼しい音を立てている。

手を胸にあてて、稲穂は遠慮がちに口をひらいた。

「なんて呼んだらいい？」

「ん？」

質問の意図がわからなかった様子で、男は目をまるくして首を傾けた。

稲穂は慌てて言い直す。

「あのっ、あなたが誰なのかわからないから、なんて呼んだらいいかと思ったの」

「ああ、名を知らぬと話しにくいものな」

男は得心がゆくと、少女の頭を撫でつつ咳払いをした。

血の塊を川の流れに吐いてから、答える。

「私は速風はやなぎ」

「はや……なぎ？」

「ああそつだ。はは、呼びにくいか。おまえの名は？」

「ええと。稲穂」

「稲穂か。きれいな名だな」

速風は口もとをほころばせた。

「ところで稲穂、もしよければおまえの村へ案内してくれないか。

体はいいのだが、着物が欲しいのでな」

「むら……は、わからないけど、服ならおかあさんがつくってくれ

るわ」

「そつか」

速風は片手で軽々と稲穂を抱え上げ、機敏な動作で立ち上がった。腰に佩いた剣の装飾がかちりと鳴る。もとはまっすぐだっただるう鞘はところどころが弾けて、青みがかった刀身がちらりと覗いている。

「かみのほうへゆけば、行き着くか？」

「うん。川のすぐそば」

「わかった」

もはや速風に苦しそうな気配はどこにもなく、川上つづくゆるやかな傾斜を、確かな足どりで歩きはじめた。

稲穂の耳のすぐそばで、彼の穏やかな吐息が聞こえた。血の匂いは消え、かわりに、萌え出たばかりの若芽に似た香りがする。

（春がきたような感じの人）

稲穂は本当は自分で歩くつもりだったが、驚くほど安定した抱かれ心地につい、うつらうつらとしはじめた。

（……あつたかい……）

彼女が大きく舟を漕ぐと、速風は声をひそめてくつくつと笑い、

小柄な体を両腕に抱え直した。

「着いたら、私もひと眠りさせてもらおうとしたら、」

見知らぬ男を伴って帰ってきた、というより、彼に送り届けてもらう形になった末娘を、両親は顔を真つ青にして出迎えた。

「なんのためにこの山奥で暮らしておると思っておるのじゃ……！」  
父も母も涙を流しながら、娘の無事を確かめるように手と言わず足と言わず、体じゅうを撫でまわす。

稲穂は面食らい、ぼろぼろの服で傍らに立つ速風を見上げた。

「私に説明を求められても困るよ」

彼は後ろ頭をかき、適当な岩に腰かけると、左手首に巻いていた金輪の束を外して老夫婦の眼前に突き出した。

「これと、新しい服を交換してくれぬか」

面食らったのは、今度は父母のほうだった。

黄金などそうそう拝める代物ではない。ましてや服の代金になど、釣り合わぬどころの騒ぎではない。

「あなた様は、どちらの大君様おおきみで……？」

「そう畏まるな。ただの旅人だ」

狼狽する老人ふたりに苦笑しつつ、速風は右手首の金輪も抜き取った。菱形の金や半透明の玉を連ねた両足首の紐も解いて、稲穂に握らせる。

「酒があれば持ってきてくれ。そうだな……、稲穂は舞えるか？」

「歌をうたってもらえるなら、少しなら」

大好きな踊りを望まれて、少女の頬がぱっと色づいた。その様子を見て、速風はオヤという顔をする。

「存外、娘らしいじゃないか。さっきはごどもなどと言ってすまなかつたな」

「えっ？ あたしはおとうさんとおかあさんのごどもよ。速風は間違っていないわ」

稲穂の返答を聞いて速風が目を丸くするより先に、老夫婦が糸目

を三日月ぐらいにみひらいて悲鳴にも似た歓声を上げた。手を取り合い、白い頭髪を揺らして喜び合う。

「あなた様が、あの速凧のみことか」

「なんだ、私を知っているのか」

速凧は半跣を組み、袖で頬を拭った。

その横で、稲穂がきよとんと立ち尽くしている。

「おとうさん、おかあさん？」

「稲穂や。この方は、わしらの叔父にあたるお人じゃ」

「おじ。おじって、なに」

「わたしたちの父様の弟君でいらせられる。生まれはわしらのほうが先じゃがの。ついこのあいだまで母神を恋しがって泣いておったというのに、なんと、立派になられたことじゃ」

「えっと……おとうさんとおかあさんの、おとうさんの、おとうと？」

父の言葉をゆっくりと反復しながら、最後の疑問は速凧に向けた。彼はというと、なにやら気まずそうな顔で顎を撫でている。

稲穂は今にも手から取り落としそうだった金の飾りを父に押しつけてから、速凧の膝に寄り添って顔を覗き込んでみた。

「よくわからないわ。どういうこと？」

「私の父と、おまえの曾祖父は同じだということだ。私はおまえにとつての大叔父だな。稲穂……、おまえは物を知らぬな」

「……ごめんなさい」

「いやいや」

速凧は、混乱しつつしょんぼりする少女の髪をやさしく撫でてやっただ。

「私とて、血統などあまり考えたことがないからな」

稲穂にというより虚空に呟いた彼の目は、いちど暗い空に向けられ、やがて小屋の脇に焚かれた炎に落ち着いた。

彼の瞳の中で赤と黄が揺れている。夕陽の色に似ていると、稲穂は思った。



(でも、夕陽はきょうは見れないわね。こんな暗い空だもの)

二段重ねの器を一瞥し、稲穂は今の時刻を知った。火のあかりで過ごしていると、時の流れが止まったように感じてしまう。

しかし時は絶えず過ぎるもので、今頃はいつもなら母の手伝いで乾燥させた木の実を磨り潰して団子を作り、天日干ししている頃だった。母と父の時間感覚もまた麻痺している様子で、日常の仕事をすっかり忘れてしまっているようだ。

(ま、いつか。お酒、お酒)

稲穂は小屋の裏にまわり、甕にびつちりとかぶせられた布のふたを慎重にはがした。

服より厚めに織られたそれに鼻をつけて嗅ぐと、頭の中がふわんと軽くなって楽しい気分になる。両親に見つかれば咎められることだったが、きょうは、ふたりは来訪者と談笑していて娘のしわざには気づきそうにない。

調子に乗って、何度も深呼吸してみた。胸がぼうつとあたためられてゆくようだった。そのうち鼻が利かなくなり、見るものがぐにやり、ぐにやりと歪みはじめてしまった。

これには、さすがにまずいと稲穂も思った。

甕の中身だけはひっくり返さないようにとその場を離れ、ふらふら、ぺたん、と雪解け水でぬかるんだ地面に尻もちをつく。内腿がひんやりとした泥に濡れて気持ち悪かったが、いったん全身から力が抜けてしまってもう立ち上がれない。

(うわーあ、どーおうしょお)

思考までもれつがまわらない。

しかも、だんだんと愉快になってきた。

(ふふー。ぐる、ぐる、ぐる……)

指で地面をなぞり、うずまきを描く。

(ひとおーつ。ふたつ。みいっつ。よっつ。いつーつ。むっつ。  
ななあつ、やあ)

八個目のうずまきを描き終わるやいなや、何物かが稲穂の細い左

足首に巻きついてきた。

ぬめりのある、うるこのざらりとした感触。

とろとろに溶けそうな脳みそでも、その正体はすぐ知れた。

とっさに振り払おうとして足首に目をやると、炎のあかりでだるうか、体に苔を生やした蛇の丸い目が赤々と輝いていた。蛇自体はさほど苦手でもなかったのだが、よく熟れたほおずき鬼灯のような眼に見つめられて、稲穂は一瞬、身動きが取れなかった。

蛇はちろちろと先の割れた舌を覗かせながら、鎌首をもたげ、酔いのすっかりさめた少女をじつと観察でもしているかのよう。

稲穂が身じろぎすると、するすると身を滑らせて地面に降りた。

しかし、彼女のそばを離れようとはしない。

「おまえ……まだ寒いんじゃないの？」

蛇が去らないのを不思議に思っ、稲穂は小声で問いかけた。

「速風かしら？ あの人の匂いにつられて、土の中から出てきちゃったんでしょ？」

すると蛇は緩慢な動きで茂みに向かい、しばらく葉や小枝を鳴らせていたが、稲穂が立ち上がる頃には完全に行方をくらましていた。

「うん、もう少し寝てたほうがいいわ」

稲穂は腕組みをして二度ほど頷くと、服の裾で指を拭ってから息を止めて甕を覗き込み、瓢をそつと差し入れた。なめらかな液体を少しかきまぜ、手近にあった深い椀に注ぐ。

客人用の酒を地面に置くのはなんとなく気が引けて、稲穂は片手でどうにか元通りふたをしめ、中身をこぼさないように注意して速風のところへ戻った。

「すまぬな、ありがとう」

椀を受け取り、すぐに飲むでもなく、速風は稲穂の姿を心配した。「えらく泥だらけだな。ころげでもしたか？」

「え。ちよ、ちよつと足もとが狂っただけ。だいじょうぶ」

「でも、血が出ている」

指摘されてはじめて、稲穂は左の足首が赤く染まっていることに

気がついた。

蛇が触れた場所だ。知らぬまに噛まれてもしたのだろうか。しかし痛みはなく、じつとりとした熱もない。

「だいじょうぶよ」

「おまえたちは、怪我で死ぬことがあるのだろうか？」

速凧は腕を老父に預けると、老母にとりあえずの衣を所望した。

「私も汚れを落としてくる。こい」

彼は稲穂を抱き上げ、あかりもなしにせせらぎのほうへ向かった。

川べりの平らな岩に彼女を降ろすと、彼は水に入りながら、すでに破れかけていた着物を引き裂き裸体をあらわにした。

「あ………れ？」

稲穂は目をこすった。何度こすってみても、速凧の背中がほのかに光を放っているように見える。おかげで辺りもつつすらと明るい。（お酒のせいかしら？）

夜目が利くとはいえ、これほど鮮やかに浮き上がって見えるのはどこがおかしくなったからではないかと疑った。

しかし速凧はなにを気にするでもなく、水面に反射する己に驚く様子もない。

「こつちに足を出せ」

腰まで水につかり、彼は長い髪をかき上げながら振り返った。

稲穂は腰を降ろし、言われたままに左足を差しだした。太陽に温められないままの川水は痺れるほどに冷たく、その中で、肌に触れる指先だけがあたたかい。

「ん。なにもないな」

速凧は、少女の足に傷ひとつないことに眉をしかめた。

「中つ国なかつくにに降りて久しいと、変若おちの力が衰えると聞いていたのだが」「変若？ それならわかるわ！ 変若おちって、あつというまに怪我や病気が治るんですよ。おとうさんとおかあさんはそれが弱くなつたからあんなに髪が白くて、体もしわしわになつたんだって言ったわ」

知っている言葉を聞いて、稲穂は得意げに胸を張った。

しかしすぐに、しょんぼりと背を丸めてしまう。

「あの蛇が怪我をしていたのかも」

勘違いして冬眠から醒めてしまった、かわいそうな蛇である。

稲穂は足で水をかきまぜながら、茂みに這っていった弱々しげな

後ろ姿を思い出した。

「だいじょうぶかな。あのこ、死んだりしないかな」

「か弱い生き物でもあるまい」

清水にもぐり、黒髪を扇状に広げた速風が笑った。

「長虫を気遣う娘というのも珍しい。おもしろいな、稲穂は」

「おもしろいって」

「褒めたのだ。そら、おまえもこい」

水中から手を伸ばし、速風は服を着たままの稲穂を引きずり入れた。

幼い胸の内側で心臓が身をすくめ、少女は体を縮こませる。

「おっ、おとうさんたちなら死んじゃってるわ！」

かぶりを振って水滴を散らしながら抗議すると、

「はは、すまぬ」

速風はひとつも悪いとは思っていない様子で謝り、稲穂を抱きすくめ、そのまま水に沈んだ。どうやら彼は、もがく稲穂を見て楽しんでるらしい。

ふたりが吐き出す泡にまみれながら、速風は彼女の額に頬を寄せた。

「ぶはっ！」

抱きかかえられたまま水面に顔を出し、稲穂は蒼白な顔で肺に空気を取り込んだ。

遊ばれていたことに気がつきはしていたが、それを怒る気力も失せてしまっている。

本当に、死ぬかと思った。

速風の胸にしがみついで必死に呼吸を整えるが、自分をこんな状態にした張本人に頼るようで正直、おもしろくない。

そこへ、とどめの一打がきたからたまらなかった。

「もう少し娘らしくなったら嫁にもらってやってもいいぞ。」

ま

あ、嫁と言ってもおまえはなんのことかわからぬのだろうがな」  
声も高らかに笑う彼を、稲穂は目に涙をためてにらみつけた。

(なによ、よくわからないけど、ばかにして！)

視線を受けて、速凧がおどけて言う。

「なんだ、それとも知っていたか？ そら、どういふことなのか説明してみる」

「う……」

実際なんのことやらで、唇を引き結んで耐えるいたいけな少女は、ただ悔しくて、思いあまって彼の顎めがけて頭突きを繰り返した。

「もう、踊ってなんかやらない！」

むちゃくちやに暴れて屈強な腕から逃げ出して岸に這い上がり、

精一杯の大声で叫んで小屋へ引き返す。

(ちよつとものを多く知っているからって、ああいふのはひどいんじゃない？)

娘の結婚を希望したのは、実は老いた父と母だということを知りもせず……。

速凧の悪口をいっぱい連ねながら帰還した稲穂は、情けない顔をした両親に出迎えられることになった。

「こんなことなら、もっと人並みの育て方をしておくべきだったよ」  
がつくりと肩を落とした親にそんな後悔をされ、我慢していた涙がいつきに溢れ出す。

(なに？ やっぱりあたしが悪いの？)

頭はずきずきするし、体はガタガタ震えるし、いいとこなしで泣くしかない。

もとより、あまり泣くことに慣れていない稲穂である。月を想う以外に、悲しいとか、辛いとか、はたまたひどく嬉しいとか、心を震わす場面に遭遇した経験はついぞない。

水の中にいるよりも、胸が苦しくてたまらない。せめて空に月が輝いていれば慰められたのに、暗いだけで、今はまだ昼間なのだ。

かなり時間が過ぎてから、衣を腰に巻きつけた速凧が戻ってきた時も、稲穂はまだ泣きじゃくりながら天上を仰いでいた。

夢の中に立っている。

稲穂はぼんやりとした気持ちで、心地よい綿雲に包まれて目を細めていた。

見えるものは、薄くももいろに染まった雲と、幾重にもひだを折るかすみ。

暗くはないが、かといって明るくもない。

すべてがあやふやで、風もなく、静かで穏やかで、ほんの少しのけだるさを感じるのみの空間。見慣れた景色とは正反対で、ふたしかで、でもそれが不安ではない奇妙さ。

(こんな夢、初めて)

昼間、あれだけ激しく泣いたせいだろうか。胸の内のものをこれでもかと吐き出したあとは、確かによくわからない感覚に陥った。頭を動かすこともなく寝入ってしまったから、こんな夢を見るのだろうか。

稲穂はつま先を伸ばし、ゆっくりと目を開けた。

途端に視界に現れる巨大な山。いや それは山ではなく、絡まりあつた幾百万もの蛇。

体は苔むし、眼は赤く。体を、燃える炎に包まれている。

恐ろしげだが、その姿は稲穂を惹きつけた。

「だいじょうぶ?」

ついと小さな口を出た気遣いの言葉に、蛇たちはいつせいに咆哮を上げた。綿雲が吹き飛び、かすみが血の色に染まる。

蛇の山の向こうに、山が小さく見えるほどの白い円が、まわりの風景から滲み出すようにして燦然と輝きはじめた。

(太陽? ようやく目をさましたの?)

だが、白銀の光に包まれた円ははつきりと輪郭をみとめることができ、昼の空に陣取る太陽とは違う似ても似つかない。

ふと、辺りが闇に呑み込まれた。

稲穂は円の正体を理解した。きのうの夜に遠く見上げた月が、今、こんなにも近い。

目の前に迫る月は、輝きながらもどこか冷め、憂いに沈んでいるようでもあり、その儚さに稲穂は心奪われた。

(あたしはあなたの影。あたしは、あなたを抱きしめたい)

少女は腕を広げ、月に差し伸べた。

山が崩れ、手首足首に蛇たちが絡みつく。どろりとした紅の液体が華奢な体を染め上げてゆく。

月は血色のうずまきに侵食され、やがて稲穂の身長の数倍ほどの、一匹の白い蛇に変化した。青白く淡く光る鱗に覆われた表面に、きらきらと銀色のかけらが浮き沈みする。

「あなた、なんて呼んだらいい？」

少女の問いかけに、身に星を散りばめたような白蛇は赤い目を細めて答えた。

「私は月夜<sup>つぐよ</sup>。そなたは……稲穂」

「どうしてあたしの名を知っているの？」

「そなたはいつも私を見ていた。私もそなたを見ていた」

稲穂に巻きついていて蛇たちはいつしか消えていた。

かわりに、繊細な銀糸を縊り合わせた輪が幾重にも重なって、瑞々しい肌を飾っていた。稲穂は右の手首を顔の前に持ってきて、浅く息を吐きながら、細やかな光の粒を見つめた。

「あなたが本当に見ているのは太陽だわ」

「そなたはそれを知っているも、私を慕うのだろうか？」

蛇は姿を人に変えた。純白よりも白く透き通る衣に身を包み、そのおもては速風とよく似ていると稲穂は思った。

耳の上の小さなみずらは、やはり銀糸を縊った紐に結われている。背を落ちる黒髪はところどころがうねるように波打ち、蛇を連想させた。

「太陽は月を見ぬ。されど月は、太陽に焦がれる」

月夜は稲穂を抱き、速風に似た、より繊細で、それでいて深みの



ある声で耳もとに囁いた。

稲穂は彼の背にそろそろと腕をまわした。髪を撫でれば、指に吸いつくようだ。

「あなたが太陽に焦がれているのはわかっていたわ。あたしはこうしてあなたに触れて、抱きしめることができた。じゅうぶんだわ」  
満ち足りた気持ちにはほど遠かったが、胸になにか、あたたかいものが灯ったのは確かだった。

しかし、光があれば闇もまた生まれる。その灯りが黒々とした影を引いたことに、稲穂は気づかない。

月夜は音もなく笑うと、稲穂の首筋に片手をあてがい、もう片方の手を服の内に滑り込ませた。手は幼さの残る体を撫で、やがてそれは愛撫に変わった。

(蛇がのぼってくる)

足先から内腿へ向かって、生あたたかな物体がぬらぬらと移動している。

稲穂は揺らく視界の中に、赤い海に沈む月を見た。

暗い目覚めだった。

くわえて熱っぽく、下半身にいたっては痺れてひどくだるい。

「おとうさん、おかあさん……」

発した声は、からからに乾いていた。そのくせ肌は粘るほどに湿っていて、寝着は体に張りついてくしゃくしゃだった。

「おまえがつづけて早起きするなんて、なにかおかしなことの前触れじゃないだろうね」

片肘をつき、体を起こしながら母が言った。

「それとも、太陽がお隠れのせいかねえ。まだ夜中だよ」

老化のすすむ手で娘の顔を撫でさする。

「なんだね、えらく冷たいじゃないか」

「え……。でも、熱いよ……。すごく」

「どれ」

稲穂の体の異変に気がつくのと、酒臭いいびきを立てる夫を起こさぬように、娘をつれて小屋を出た。

外では、皮膚にほたる火のような明るさをまとわせた速風が上半身はだかで空を見上げていた。

「おはよう……と言うには、まだ早いな」

いくらか生氣に欠ける声音だった。振り向いた顔もどこか虚ろで、悲しみさえ匂わせるよう。

「さしもの速風のみことも、こんな真つ暗闇では気力が出ませぬか」

「はは、ただ中つ国が慣れぬせいだよ」

髪をかき上げ、速風は寄り添い合う母娘に近づいた。

「どうかしたのか、稲穂は。きのうの水浴びがまずかったか」

稲穂は文句のひとつも言いたかったけれど、億劫で、ため息をつくだけで無視をする。

母は取り繕うように笑顔を作り、猫なで声で速風をうかがった。

「まだまだごどもで。もう少しお待ちくださいな、今に娘らしくなりますよ」

「それは楽しみだな」

さして愉快そうでもなく乾いた笑い声を一つ立て、髪を払うと速風は川上へ歩いていってしまった。淡い光に引き寄せられたらしい地鼠が一匹、彼を追う。

母は無愛想な娘を咎めることなく、川原へいざなつた。

汗に乱れた服を脱がせ、枯渴した地面のごときでのひらに水をすくう。いくらか温めたのちに稲穂の肌に向け、懐から取り出した布きれでこするようにして、赤い穢れともども隅々まで拭つてやつた。「これでおまえも立派な娘。花嫁の衣装を仕立ててあげよう。八千やち亦またに見顕まされる前に、みことのような貴あめつがみき天あめつがみつ神と出会えて幸運だつたよ」

「はなよめ？ やちまた？ あめつ……かみ？」

熱がうつすらとひいて、いくぶんか晴れやかになつた頭で稲穂は繰り返した。

「あの人。速風は、なにか特別な人なの？」

「速風のみことは、天上の原にまします日輪、晝女ひるめのみことが弟君天つ父神が根の国の女神と決別されたあとに、おひとりでお産みあそばされた御子じゃ。女神の血を引く我らにとって、みことはすべてをあますことなく照らしてくださる方。稲穂、おまえはみことのおそばにお仕えするのじゃ」

稲穂はいかにもわけがわからないという顔で聞き返すような素振りを見せたが、老母は少し眉をひそめただけで、話をつづけた。

「おまえの七人の姉は、みな八千亦のもとへ行ってしまった。親の制止も聞かずに。やつらのために我らが里は失われてしまったというのに、じゃ」

怒りを隠そうともせず語る母を、稲穂は初めて見た。

恐ろしかった。酒を嗅ぐのを露見された時とは、くらべものにならないほどに。いたずらを叱る時の表情とはまるで違う。

「じゃが、みことの力をもつてすれば八千亦を退けることも可能ぞ。八千亦なぞが、天つ神であるみことに敵うわけが……これ、どこへゆくのじゃ！」

はだかのまま、稲穂はたまらず駆け出した。駆けながら、腿の内側を蛇の亡骸のようなものが伝い落ちてゆく感覚に怯えた。

闇の中を下流へ走った。石ころが砂利に変わり、さらさらの砂になった。

やわらかなくぼみに足を取られ、ころんだ。

衝撃にかぶりを振りながら顔を上げ、稲穂は、赤い月を見た。

(こんな月、どこかで……?)

せせらぎとは違う、水が打ち寄せる音が辺りに響いている。

(海だ)

山中の小屋付近のほかに彼女が唯一、知っている場所だった。年に一度、塩を得るために親子三人でやってくるのだ。

冬に、しかも夜に訪れたことはなかったが、潮風は変わらず鼻先に磯のかおりを運んできては耳もとの髪を梳いてゆく。

体についた砂をはたき落とすこともせず、稲穂は波打ち際へ近づいた。くるぶしを砂まじりの波が撫せては、彼女を誘うかのようにゆっくりと引き返す。

鬼灯に似た今にも溶け出しそうな満月は、まるで稲穂ひとりを見つめるかのように真正面にそびえている。

「すべて、満ちた」

突然、聞いたことのない声が頭上から降ってきた。稲穂は顔を上げた。

「俺のもとにこい、稲穂」

腕と胸の筋肉を盛り上がりさせた壮年の男が、自分の名を呼び、手を差し伸べている。

「あなたは……?」

「俺は八千亦」

母が憎む者の名をなのった男は、稲穂を抱きかかえ、海風に髭を

なびかせ哄笑した。

「これで数が揃う。悲願が叶うぞ」

「ひがん……？」

聞き返すと、八千亦は目を細めて頷いた。器用に片腕で稲穂を支え、もう片方の手で小さな鼻と青ざめた唇を覆う。

稲穂は逃れようと身をよじった。

幾年を経た酒に似た、妖しい香りがした。ふ、と意識が遠くなる。

「夢も見ぬほどに、深く」

静かに脳髓にまで響く声が、少女の意識を眠りの淵へといざなうた。

\*

息苦しさをおぼえて稲穂は目を覚ました。

景色は闇から一転し、大気は赤々と照らされている。

眠っているあいだに連れてこられた場所は、父母の住む山とは連なっているようだったが別の山の中腹の、熱気と湿度の高さに眩暈がしそうな踏鞴場たたらばただった。夜だというのに、男女入り乱れて大勢が威勢のいい掛け声を上げて働いている。

稲穂はただただ目を見張った。初見だったし、ここがなにをするところなのかもわからない。くらくらする頭で、ただ、ここは慣れない人間には呼吸もままならず、むき出しの肌にはとても耐えられない場所だということだけ痛いほどに思い知った。

「起きたか。待ってる、今、きれいな衣を着せてやるよ」

八千亦は稲穂をかばうように身をかがめると、大きな体躯に似合わない素早さで作業場を駆け抜けた。

向かう先に、小屋の何十倍もありそうな横長の屋敷が見える。戸口に女が七人、手に色とりどりの衣を持ち待ちかまえている。

彼女たちは八千亦から稲穂を預けられると、いっせいに歓声を上げた。

「あなたが稲穂ね！ わたしがいちばん上の初芽よ」  
彼女を皮切りに、娘たちが次々と自己紹介をする。

みな花のように美しい。艶やかな服はもちろんのこと、姿かたちまで若々しく生気に溢れている。

「感動のご対面だな」

八千亦是豪快に笑い、

「変若の力というものは素晴らしいな。俺も早く手に入れたいもんだ」

そう言い残して、賑やかというより騒がしい踏鞠場へ踵を返す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2246z/>

---

闇に踊る物語

2011年12月13日08時53分発行